

大阪市東部地区、同北部地区 特殊健診テーマに講習 実施報告の義務化受け開催



職場巡視の重要性を語る津田氏＝9月25日、M&Dホール

酸などの歯に有害な物質を取り扱う事業者に対し、10月から労働基準監督署への歯科健診の実施報告が義務化されたことを受け、大阪市東部地区と同北部地区は講習会「歯の酸蝕症特殊健診の実施」を9月25日、WEB併用で開いた。講師は労働衛生コンサルタントで歯科医師の津田康博氏（東大阪市開業）が務め、55人が参加した。

津田氏は、酸蝕症特殊健診について、「歯科医師なら実施できるが、酸蝕症は多様な現れ方をするため、問診・職場巡視・経過観察によって総合的に判断する」と述べた。「有所見」と診断すれば労働災害の発生になるため、「診断に迷ったら経過観察し、業務起因性を慎重に判断することが必要」と述べた。

7月15日付に歯科特殊健診の記事を掲載しています。詳しくは協会HP (QRコード参照)。



2022 府交 大阪交渉

障がい者歯科 受診しやすい環境を

大阪府のHPでは障がい者歯科診療施設として、大阪急性期・総合医療センターなどの医療機関が掲載されているが、掲載は大病院のみで一次医療機関の案内はない。また、インターネットで使用できない情報にアクセスできない状況だ。知的障がいや自閉症で

も程度によって治療の困難さは変わってくる。障がい者の歯科治療では、極度の恐怖感を抱き受診できない、緊張から治療を受ける姿勢が困難ななど様々な状況が想定されるため専門医による対応が必要となる。

20世紀の医学の大いなる発展は、我が国を平均寿命が80歳を超える長寿大国へと押し上げた。したがって21世紀においては、病気やその後遺症など健康問題によって制限を受けることがない生活時間、いわゆる「健康寿命」の延伸が重要な課題である。世界保健機構と世界銀行が考案した障害調整生存年数(DALY)において、精神疾患や発達障害などの精神神経障害は、悪性新生物(がん)および心臓疾患と並ぶ3大疾患の1つとされ、「健康ロス」が非常に大きな疾患である。また、精神神経障害は働き盛りの世代に多いため、社会的経済的損失も大きな問題である。さらに、精神神経障害は、患者の治療満足度の高い有効な医薬品が乏しく、アンメットメディカルニーズが高い疾患領域であり、より有効な治療法の開発が待ち望まれている。

ジャーナリストが語る 目米同盟のリスク

米国の中距離ミサイルの日本への配備は、中国もロシアも非常に警戒しています。2019年11月の中口「戦略安定協議」では、米国のミサイル発射には対抗措置を取るべきとの認識で一致。

戦争を予防する外交へ

1962年のキューバ危機は、ソ連が米国を射程に収める中距離核ミサイルをキューバに配備したことがきっかけでした。それと同じことが、逆の構図で日本を舞台に起きようとしています。私たちは歴史の教訓から、中距離ミサイル配備のリスクに目を向ける必要があります。

ASEANの努力 「抑止力」論は際限のない軍拡競争を招き、戦争のリスクを増大させてしまいます。日本が進むべき道は戦争を予防する外交です。

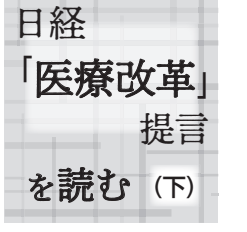
2003年には紛争の平和的解決を原則とする「東南アジア友好協力条約(TAC)」に中国を加入させることに成功しました。まさに外交の力で中国が武力を使って領土を奪うことを止めてきたのです。

日本は平和憲法を活かす、ASEANのように外交によって米中戦争を予防する方向に進むことが必要です。日本国民の力で日本の進路を大きく変えることができれば、世界の戦争のリスクを大きく減らすことができます。改憲を阻止し、対米追従、抑止力強化一辺倒の安全保障からの転換が求められています。

「抑止力」論は際限のない軍拡競争を招き、戦争のリスクを増大させてしまいます。日本が進むべき道は戦争を予防する外交です。

2003年には紛争の平和的解決を原則とする「東南アジア友好協力条約(TAC)」に中国を加入させることに成功しました。まさに外交の力で中国が武力を使って領土を奪うことを止めてきたのです。

高齢者に3割負担迫る



健診は広域連合と大阪府歯科医師会との委託契約で実施されており、歯科医師会非加入の歯科医師は健診を実施できない。協会は患者が「かかりつけ医」や最寄りの歯科医療機関で健診を受けられないケースがあるのは不合理と指摘した。

さらに医療費の増大を問題視し、「給付の発想転換が必要」と説明。保険給付範囲を縮小するとともに、長年の財界の悲願である混合診療の解禁を訴えた。

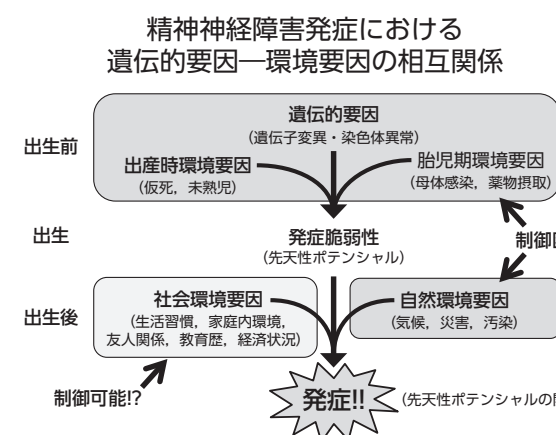
見通せないのは、公的医療保険の財源として消費税を位置付けたことだ。増税についても「早急に議論に着手すべき」とした。国際的にみて著しく低い大企業の社会保険料負担からは目を背け、国民にだけ負担を求める提言は「改革」の名に値しない。

布施氏の解説動画 YouTubeで公開中

「おわり」 (布施祐仁)

「おわり」

「おわり」



大阪大学大学院歯学研究科 薬理学教室 教授 田熊 一徹 准教授 早田 敦子

歯学研究が開く 歯科の未来 ⑰ 環境要因説に基づく 精神神経障害の研究を通して

豊かな環境なら 発症緩和 精神神経障害の発症において、遺伝的要因のみならず環境要因の重要性が示されている。当教室では、広義の意味での環境要因として注目されている「胎生期・産前期の母体環境要因」が出生児の精神発達に及ぼす影響や「発育期の環境要因」が精神神経機能に及ぼす影響について研究を進めており、例えば、代表的抗てんかん薬であるバルプロ酸を投与した妊娠マウスの仔が自閉症モデルとなることや、自閉症様の異常行動と脳器質障害との関連性、ならびにオキシトシン関連薬などによる新たな薬物療法の可能性を示してきた。また、統合失調症の遺伝的要因をもつマウスにおいては、玩具等で刺激を強化した豊かな環境で発育させると発症が緩和されることを見いだした。医療費削減が唱えられる昨今において、薬物を用いない治療へと繋がる興味深い知見である。

口腔領域研究との融合必須

歯学研究科の教室でありながら、現状は顎口腔領域と懸け離れた研究テーマとなっているが、高次脳機能発達における咀嚼や咬合負荷の重要性や、口腔・腸内環境の精神機能への影響など、近年の知見に目を向けると、精神神経障害の病態解明において顎口腔領域研究との融合は必須であると思われる。今後は「環境薬理学」から「口腔ブレインサイエンス」へと研究を展開させながら、精神神経障害の克服ひいては「健康寿命」の延伸を目指したいと考えている。